大学入学共通テストと高校・新学習指導要領

思考・判断・表現力の評価へ工夫進む

令和5年度共通テストの分析報告書

大学入試センターは6月30日、今年1月に実施した令和5年度大学入学共通テストの分析報告書を公表した。得点調整が行われた理科に対しては問題量などの改善を求める意見が上がったが、他教科では適切とされた。「思考力・判断力・表現力」を評価するため、題材や出題形式の工夫が進んでいることも指摘された。

分析報告書は高校の教科担当教員による外部評価と、教科団体の意見、それに対する問題作成委員による自己評価を載せている。外部評価では出題範囲や問題の題材、難易度などを分析し、4段階で評価した。大部分は4（適切である）とされるが、得点調整を実施した科目などには厳しい評価が付くこともある。

から「受験者の学力を適正に評価できたとは言えない」として2の評価を付けた。

各問の分量や難易度では、遺伝の計算や実験考察などを題材にした第5問について言及。内容の難しさ以上に、場面設定や出題形式が複雑で正答率が低かったなどと指摘した。複雑な思考が必要な小問では、受験者がじっくり考察する時間を与えるため選択肢を減らすべきだと求めた。

これに対し、入試センターの自己評価では、暗記重視から思考力重視の学習への転換を促す共通テストの狙いを踏まえ、問題のストーリー性を重視したり、初見の題材に丁寧な説明を行ったりした結果、分量を抑えることができなかったなどと分析。今後、分量や難易度に一層の注意を払うとした。

例えば、第1問Bのサマーキャンプの勧誘のウェブサイトを読んで問いに答える問題。文章量の多さや複数の箇所に注目して共通点を見つけることが求められる点が難しかったと指摘された。

第6問Aは収集についての記事を読み、要点をまとめたメモを使って発表する場面設定。受験者は3パーにわたる約630語の文章を読み、メモの要点を完成させる。特に難易度が高かったとされた。

問題の題材は、芸術鑑賞や買い物、生徒会活動といった受験者に身近なものから、アカデミックなものまで幅広い話題が取り上げられた。また素材はウェブサイト、リポート、ニュースレター、ブログなど「本物らしさ」が意識されていると評価された。

理科　情報量の多さ、改善求める

外部評価で、「生物」の難易度の適切さが最も低い「1」と評価された。今年の「生物」の平均点は、センター試験時代を通じて過去最低を2年連続で更新。「生物」を含む理科②で得点調整が行われていた。得点調整前で39・74点。理科で最も得点の高かった「物理」との間には23・65点の差があった。

外部評価では、理科の難易度について「背景や設定の情報量が多く、それらを理解するための時間や労力がかかり過ぎ、思考する時間が十分に確保できなかった」と指摘。総合評価でもこうした理由

今年1月に実施された大学入学共通テスト＝東京都文京区の東京大学（共同）

■ 令和5年度共通テストの平均点

教科		科目	平均点
国語（200点）		国語	105.74（52.87）
地理歴史（100点）		世界史A	36.32
		世界史B	58.43
		日本史A	45.38
		日本史B	59.75
		地理A	55.19
		地理B	60.46
公民（100点）		現代社会	59.46
		倫理	59.02
		政治・経済	50.96
		倫理、政治・経済	60.59
数学	数学①（100点）	数学Ⅰ	37.84
		数学Ⅰ・A	55.65
	数学②（100点）	数学Ⅱ	37.65
		数学Ⅱ・B	61.48
		簿記・会計	50.80
		情報関係基礎	60.68
理科	理科①（50点）	物理基礎	28.19（56.38）
		化学基礎	29.42（58.84）
		生物基礎	24.66（49.32）
		地学基礎	35.03（70.06）
	理科②（100点）	物理	63.39
		化学	54.01
		生物	48.46
		地学	49.85
外国語（200点）		英語（リーディング）	53.81
		英語（リスニング）	62.35

※（　）内の数値は100点満点に換算したもの

英語（リーディング）　幅広い題材、本物らしさ意識

英語（リーディング）も平均点が大幅に下がった。昨年度は61・80点で、令和5年度入試は53・81点だった。ただ、外部評価では「外国語の知識を実際のコミュニケーションにおいて目的や場面、状況などに応じて活用できるかを評価するテストとして適切」と総合評価で4を付けるなど高く評価。事実と意見を整理しながら読む問題や、複数の情報から要点や書き手の主張を読み取り比較する問題など「思考力・判断力・表現力を測る問題となるよう工夫されている」とした。

一方、各問では、「やや難度が高い」と指摘された問題も多かった。

数学　ボールの軌道考察は「良問」

平均点が過去最低だった昨年から例年並みに戻ったのが「数学Ⅰ・A」。昨年度37・96点から今年は55・65点と、ここ数年続いている50点台に戻った。入試問題は外部評価委員から「基本～標準的な難易度で構成されている」などと分析され、出題範囲や設問内容も適切だったとされた。

「数学Ⅰ」でも出たバスケットボールの軌道を2次関数でモデル化した第2問の(2)。異なる二つの放物線からシュートの高さについて考える問題などが出題された。

外部評価では「日常生活の事象を数学化し、問題解決の見通しを立てる力を問うている」「思考力・判断力・表現力等に焦点をあてた良問」などと評価された。

また、総合的にも「数学的な問題解決の過程を重視し、問題作成方針に合致」しているとして授業改善への示唆を与えるものだと指摘した。

一方、分量を巡り意見も付いた。「事象を数学化する部分の文字量がやや多く、受験者が問題場面の理解に時間を要してしまう可能性がある」として一部に改善を求めた。教科団体からも「問題文や図表の量がやや多かった」とされ、日常の事象を扱う場合は、思考の時間が十分に確保できるよう求めた。

注目大学に聞く

信州大学

教育学部
村松 浩幸 学部長

教科横断学習を指導する教員育成へ

信州大学教育学部が本年度の入学生から、学部独自の履修認定制度「STEAM教育認定プログラム」を開設した。村松浩幸・教育学部長に狙いを聞いた。

◇

――認定プログラムを始めた経緯を教えてください。

予測不能な時代になり、専門家でも明確な解を持てない問題が出てきています。教員にも特定の教科の枠組みに収まらない教科横断的な学びを推進・指導する力が必要ですが、教員養成には免許法の縛りがあります。それに対し、大学では一般的に特別な科目を設け、専門の教員が教える仕組みを取ります。しかし、それでは担当教員に取り組みが依存し、大学全体に浸透しません。そこで学部全体で取り組む認定プログラムを作りました。

――認定プログラムの内容は。

1年生には後期に、STEAM教育の基礎知識を学ぶ概論科目を開設します。2年生からの教科指導法などの科目で、その教科等とSTEAM教育との関連を扱います。全ての科目で実施するため、学生は幅広く接点を学ぶことになります。4年生では教育実習を踏まえてSTEAM教育の授業づくりの科目を開設します。指定科目20単位以上を取得すると、学部が認定証を授与する仕組みです。履修は任意ですが、できれば全員に受けてほしいと考えています。

――信大の教員養成課程では小中の免許取得を必修としています。学生への負荷は増えませんか。

極力少なくしました。実質的に単位が増えたのは、1年生の概論と4年生の授業づくりについての科目の合計2単位です。それ以外の教科指導法などの科目は、もともとICTを活用指導力を育成するために各コースの授業の中で教員が教えていた仕組みを土台にしました。

――具体的には、どのような授業を計画していますか。

学んだ教科の知識を基に問題解決に向かう従来のアプローチとは逆に、STEAM教育では、まず課題があり、それを解決するために教科を深めるという考え方が柱になります。例えば、小学校の理科で、音の性質を学ぶために糸電話の仕組みを学習しますが、声が聞こえやすい糸電話にするためには、どうすればよいかを考え、素材の違いによるデータを収集・整理したり、糸電話の製作を工夫したりする。子どもの課題と結び付いた授業をいかにつくるかが大切です。

――認定プログラムは、どのように運用しますか。

教員採用選考で加点されたり、資格として使えたりするようなものではなく、あくまで学びの証明です。しかし、免許状の専門の学問領域だけでなく、問題解決的に教える視野や指導力を育てるプログラムとして周知されてほしいと思います。

※「第10回 夏の教育セミナー」に先駆けて高校教育や大学入試に関する情報を掲載します。

第10回
夏の教育セミナー
2023年実施
2025年共通テストと新学習指導要領

主催：日本教育新聞社／株式会社 ナガセ（東進ハイスクール・東進衛星予備校）
後援：文部科学省、各都道府県教育委員会 ほか（申請中・予定）

8/1（火） 東京会場　ベルサール新宿グランド【席数限定】
8/3（木） 大阪会場　スイスホテル南海大阪【席数限定】

▶各会場とも／13時開始・17時終了予定（交歓会～18時）
18時ごろまで参加者同士の交歓会もございます（希望制・無料）。ご来場の先生には、限定資料や研究に役立つ情報をご提供いたします。また、追加申込なしで8/14～31のオンライン配信も視聴いただけます。

高等学校の先生対象　参加無料

8/14（月）～31（木） オンライン にて配信
学校や先生方のご自宅から、期間中ご都合の良い時間にオンラインで参加できるWEBセミナー形式です。パソコン・タブレット・スマホから講演動画を視聴できます。

お申し込みはWEBで！ 好評受付中！
夏の教育セミナー　検索
日本教育新聞、および東進（株式会社ナガセ）のウェブサイトからも、専用サイトに行くことができます。
最新情報は順次公開
www.summer-seminar.com
お問い合わせ　夏の教育セミナー事務局
summer-seminar@nagasebros.com

講演者からのメッセージ紹介
基調講演と分科会（授業実践）の講演者からのメッセージです。
敬称略

東京・大阪会場

基調講演
森下 平
（独）大学入試センター　審議役
（兼）試験・研究統括補佐官
（兼）試験企画部長
予見困難な社会を生きていくための力を育てるとして始まった高大接続改革。学力の3要素の育成を目指す高等学校学習指導要領が昨年度から順次実施され、各高等学校では新しい教育課程に基づく授業が始まっています。
大学入学共通テストも高大接続改革の一環として導入されて3年。5回目となる令和7年度試験から、新しい教育課程に基づいて学習した方々が受験するため、大学入学共通テストも新しい学習指導要領に基づくものになります。
今回の講演では、大学入学共通テストが導入された経緯を振り返りつつ、大学入試センターがどのような方針で問題を作成しているのかにも触れながら、令和7年度試験からどう変わるのかについて、ご説明します。

東京会場

国語
河口 竜行
和洋国府台女子中学校・高等学校 教諭
生徒たちが主体的に学べるようになるための支援をするのが私たち教員の役割、ということに関しては、大学入試が変わっても課程や評価が変わっても、変わることはないと私は思います。むしろ、入試・課程・評価、またそれを生み出す社会そのものが変われば変わるほど、ますますその重要性は増していきます。
今回は、生徒の脳がフル回転する国語の対話型授業が何を目指し、そこへどのように近づいていくのかについて、実際のワークを通して参加者の皆様と一緒に考える時間としたいと思っています。三年間の「動画配信」を経ての久しぶりのリアル開催で、皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

数学
鶴迫 貴司
東山中学・高等学校 教諭
今年のセミナーでは、共通テストを活用しつつ、普段の授業でどのような数学的な観点について触れているのかを、具体的な資料に基づき話をすすめていこうと思います。「図形と計量」や「ベクトル」をはじめ、それ以外にも、統計リテラシーの教育が本格化する中、授業ではどのような導入（初歩的な話）をしているのかについても話ができればと考えています。本年度も精一杯尽力させて頂きたく存じます。少しでも先生方のお役に立てれば嬉しい限りです。よろしくお願いします。

大阪会場

国語
齋藤 祐
中央大学
杉並高等学校　教諭
大学入学共通テストの標準化、1人1台ICT端末の導入、ChatGPTを始めとする生成AIの登場と、学校と国語科をめぐる環境は激変を遂げつつあります。ただ、ここで問われるべきは、いま一度、私たちが培ってきた、教科としての方法論を見つめ直すことにあります。今回、久方ぶりとなる対面セミナーでは、定番教材である芥川龍之介「羅生門」を、ICTを駆使して、ALで時間をかけて「読む」という実践を報告します。生徒の成長を促すために、いかに生徒を読む気にさせるか、考える気にさせるかを、一緒に考えていきましょう。

数学
酒井 淳平
立命館宇治中学校・高等学校　教諭
一昨年は「新共通テスト」、昨年は「新学習指導要領」という全体テーマがあり、それらと国語の授業とを関連づけてお話をさせていただきました。その両者は意識しつつも、今年はより授業そのもの、またその土台となる考え方に焦点を絞ってお話ができればと思っています。具体的な授業の例を含むものにはなりますが、生徒たちが主体的・対話的に学べるようになることへの支援に資してお話しすることを重視するつもりです。そこで今回は「対話型授業基本編」と名付け、特に対話型授業の経験の少ない方々に向けて、ということを意識してお話しできればと思っています。